

15.  $^{111}\text{In}$  標識血小板による心腔内血栓描出の試み

池田 俊昭 田所 克己 石井 勝己  
中沢 圭治 工藤 正幸 高松 俊道  
渡辺 潤二 依田 一重 松林 隆

(北里大・放)

今回われわれは  $^{111}\text{In}$  標識血小板を用いて心腔内血栓の描出を試み、エコー所見と対比し検討した。方法は  $^{111}\text{In}$  標識血小板 1 ないし 3 mCi を静注、48 時間後に全身およびスポット撮像を行った。血小板に  $^{111}\text{In}$  を標識する方法は昭和 60 年 2 月より昭和 62 年 6 月までは  $^{111}\text{In}$ -oxine を用い、昭和 62 年 7 月からは  $^{111}\text{In}$ -tropolone を用いた。対象は心腔内血栓有無の目的で行った 51 例であり、うち  $^{111}\text{In}$ -oxine を用いた症例は 42 例、 $^{111}\text{In}$ -tropolone を用いた症例は 9 例であった。この内 5 例は弁膜症等に対する手術が行われ、血栓の有無が確認されている。結果は、シンチグラフィ所見同様であった症例 3 例、エコー所見同様であった症例 1 例と、エコーよりシンチグラフィのほうが診断率は高かった。

## 16. 心筋虚血の定量的評価法——負荷心筋 SPECT washout rate curve を用いて——

細井 勉 西村 重敬 加藤 健一  
中西 成元 関 顕

(虎の門病院・循セ・内)

村田 啓 松田 宏史 (同・放)

負荷 Tl 心筋 SPECT washout rate curve (WO) と circumferential profile curve (Cir) を用いて心筋虚血を定量的に評価した (WO 法, Cir 法)。WO 法と Cir 法の有用性を、負荷 Tc 心プールシンチ  $\Delta\text{EF}$  を指標として比較検討した。[対象と方法] 対象は梗塞のない狭心症例 25 例である。SPECT 像より、心尖部側と心基部側の心短軸断像について WO と Cir を作成した。WO が正常下限より低値を示す部分の面積和を求め  $\Sigma\text{WO}$  とし、運動負荷直後の Cir が正常下限より低値を示す部分の面積和を  $\Sigma\text{Cir}$  とした。[結果と結語]  $\Sigma\text{WO}$  と  $\Delta\text{EF}$  の間に相関係数  $-0.64$  の有意な相関を認めた。 $\Sigma\text{Cir}$  と  $\Delta\text{EF}$  の間には有意な相関を認めなかった。このことは WO 法は Cir 法より優れた指標であることを示唆する。

17. 虚血性心疾患における運動負荷  $^{201}\text{Tl}$  心筋 SPECT の有用性について (側副血行路の評価および PTCA による治療効果の判定)

細井 宏益 山崎 純一 河村 康明  
奥住 一雄 若倉 学 五十嵐正樹  
岡本 淳 森下 健 (東邦大・一内)  
大沢 秀文 宮入 誠 矢部 喜正

(同・循セ)

側副血行路を有する虚血性心疾患では心機能や心筋 viability は良好に保たれるとの報告が多いが、運動時の側副血行路の機能的な役割については不明な点が多い。今回われわれは側副血行路を有する陳旧性心筋梗塞 (OMI) 7 例、狭心症 (AP) 5 例に対し運動負荷 Tl 心筋 SPECT を施行し、%Tl uptake, washout rate の定量解析により心筋の viability を評価するとともに PTCA 後の治療効果について検討した。責任冠動脈に 100~99% の狭窄があり側副血行路を有する AP 症例では、運動負荷時、75% 前後の狭窄を有する側副血行路を持たない AP 症例とほぼ同程度の虚血性変化が認められたが、washout rate は有意に低値を示し、負荷終了後の側副血行路血流の低下が示唆された。責任冠動脈に 100~99% 狭窄を有し側副血行路の認められた OMI 症例では、PTCA 後 washout rate の良好な改善がみられ、心筋の viability を保持する上で側副血行路が重要な役割を果たしていることが示唆された。

18. 肥大型心筋症における負荷  $^{201}\text{Tl}$  心筋イメージングの臨床的意義

渡辺 千恵 廣江 道昭 竹中 直子  
太田 淑子 近藤 千里 牧 正子  
日下部きよ子 重田 帝子 (東女医大・放)

肥大型心筋症は、多くの場合無症状であるが、不整脈による突然死がみられるため予後の評価が問題となっている。今回われわれは負荷  $^{201}\text{Tl}$  心筋イメージングの施行された 77 例の肥大型心筋症に対し、負荷法の違いによる心筋病変の出現度、異常な心筋灌流像を示す症例の臨床的意義につき検討した。77 例中 45 例に運動負荷 32 例にジピリダモールによる薬物負荷が行われ、心筋灌流異常の出現頻度に有意差はなかった。またホルター心電図の施行された 39 例において、心筋灌流異常を示す症